

小田原史談

第10号

談会
小田原幸一丁目
小田原市文化館
郷土文庫

現代 語訳 小田原大秘録 (七)

石井富之助

しかるに大主君は近頃唐
犬や日本犬の類をお飼いに
なつて楽しんで来た。こ
の日本犬には誰もかれも持
てあましていたが、酒井伴
六が御前詰の時、伴六の刀
に小便をしかけ、伴六に向
つてはなはだしくほえかけ
た。伴六は大いに怒つて、
首筋をひつつかみ手元へ引
き寄せて、たたみに鼻のむ
けるほどこすつたので、日
本犬は苦しげにかけめぐり
御前へとんで行つた。殿様
はそれを御覧になつて、
「誰が日本犬を仕置きした
か、憎つき奴である。」

えられ
「わが秘蔵の犬を臣下の分
際で仕置き、その上われに
向つて過言千万である。手
打にするからこれへ出る。」
伴六も顔色をかえ
「これはわが君の御一言と
も覚えません。かりそめに
もわたくしは御軍殿の武士
でございませぬ。しかるに畜
生と生命をとりかえようと
いう思召し、はなはだ心
得がたいことです。そのよ
うな主人に仕えていること
はまことに残念、今一言仰
せきければよ。」

と、お居間の唐紙をひいて
足早にお入りになつた。酒
井のいきおいはまことにす
さまじいものがあつた。
このようなためしが無い
わけではない。むかし、神
君が岡崎のお城にお出でに
なつた時のことである。勅
使上使など御馳走のために
と、長さ三尺ほどの鯉三本
をいけすの中に放しておか
れた。

ある時、鈴木久三郎とい
う者がその鯉のうち一本を
とつて御台所で料理するよ
う申しつけ、その上織田信
長公よりおくれた南部諸
白一樽の口をきつて、自分
ものみくらいい人もふるま
つた。みんなはさだめし鯉も

酒も拝領してのことと思つ
ていた。
ところが、間もなく神君
はいけすのところへお出で
になり御覧になると、三本
の鯉が二本しか見あたらな
いので、お預りの坊主を呼
んでお尋ねになると「つい
先日鈴木久三郎が申しつけ
て、鯉を料理し自分も食
い人にもふるまいました。」と
申しあげた。もつてのほか
と御立腹になり、だんだん
御吟味をなさるとまつたく
その通りであつたので、大
いに御機嫌をそんじ、御手
討ということになつた。長
刀のさやをはずして御広縁
に出られ、鈴木を召しよせ
た。久三郎は覚悟をきめて
すこしもひるまず、恐れる
気色もなく、露地口から出
てかしまる、その間三十
間ばかり。

神君はるかに声をかけて
「鈴木、不屈者なるによつ
て成敗するぞ。」
久三郎は大小を五、六間
うしろへからりと投げすて
大きい眼に角をたてて申し
上げた。
「そもそも魚鳥のために人
間をかえるということがあ
つてよろしいものでしょう
か。そのようなお心で天下
をお望みになつても達せら
れるはずはございませぬ。
われらも生ある者ですが、
成されたいように成されま
せ。」
と眼をかつて見ひらき、
大肌になつて御前へ進みよ
つた。
神君は長刀をお捨てにな
り「もはや許す。」と仰せら
れ、そのままお座敷へ入ら
れ、改めて久三郎を召し寄
せて
「その方が忠節を深く志さ
ずこと感じ入り満足に思
う。先日も鷹場において鳥
をとらえ、城の堀で綱をう
つた者共を近日処罰しよう
と思ひ押籠めておいたが、
兩人とも只今赦免する。」と
と仰せられた。
久三郎ははらと涙を落
とす
「わたくし如きものの志を
お取上げ下さいましたこと
は、近頃有難きことでござ
います。天下をしろしめす
べき御瑞相と存じ上げま
す。」

これを聞いて童たちは、
「岡崎城主はよい城主」と
いいはやしたという。
これを今の世に岡崎女郎
衆というようになったとい
うことである。

まことにこの度の酒井の
ことは鈴木例とよく似た
ことであつた。

お知らせ

○夏の史跡めぐり
本会行事の夏(八月)冬
(二月)の史跡めぐりに
ついては、一般大衆から
相当期待されているので
理事の方々の具体案が出
来次第発表と同時に募集
することにいたします。

○今から準備に取りかかる
毎年秋の文化祭参加特別
展覧会は、大好評を博し
ている。本年は内容的に
はどんなもので、主題を
何んとするかを今から心
がけて理事会の議題にさ
せて貰うようにしようと
はないか。

○南足柄町の歴史
「あしがら」発行
足柄史談会員の関野惣平
遠藤安太郎、加藤誠夫氏
らにより南足柄町の歴史
が出来た。これは限定版
で大体七月下旬発行で
三百五十円位とのことだ
る。

大黒屋の話

永田清助

或る人が小田原に「大黒屋」という家があったかしら、とさも懐しく然かも感慨無量な態度で口ずさんだというのを聞いて、ふと次のようなことを思いおこした。

時は明治の二十四年、当時須藤町の東側の丁度中程の所に、乾物類を賣いながら主に麩の製造販売を相当手広くしていた店があった。これが大黒屋という店であった。出火のため焼失し、今日では余程の古老でないといふ聞でさえ話題はうすれてしまっている。真実の程を明さらかすには容易でない。此の大黒屋から出火した時、その北方に四、五軒南方は町端れ迄の全戸と、其の向い側の西側は北方四五軒、南方の多びす屋という靴製造家の家を焼して全部焼けてしまった。当時落着が立ちまして「大黒屋さんが火を出して、多びすさんが火をよけた」と御もつともらしく、しかもこのこと伝え伝えて一時評判だ

ったという事です。此の須藤町はたしか安政年間と申すが、当時の町奉行の御邸が上幸田にありました時のことです。丁度大晦日、一夜明ければお元日という時、この御邸から出火した。相当な大火があった。そうだが幸にして此の大火に類焼を免れたのが前記の大黒屋並にその周辺一帯の家屋で何れも城下町にふさわしい古びた建物で、しかもどの家をもて町内の人々かばかりなので町内の人々から余りにも羨ましがられていた。

ところが火事だ、須藤町だ、火もとは大黒屋だ！となると、日頃から心よく思っていない連中が多かったため、消火に協力するどころか寧ろ焼いてしまえ、と極めて否協力的であったと古老から噂話として聞かされた。

私は明治十六年二月に生まれていますが、若い時からことうした懐古的というか、こんなことに心を傾けること

が好きだ。それで、今は故人となられた町内の井上嘉七さんから、こうした話の度々伺ったものだった。その時の話に、大黒屋さんは自ら此の出火に痛く責任を感じ、町内を片端から謝罪にまわったということであるが、その謝罪の仕方は、一軒毎に敷居や土台に手を置いてあやまっていたが、その時の姿や動作はいやはや実

医王山正見寺の由来

小田原史談会副会長

井上英一

小田原市の北端桜井地区は現在農村地帯で、昭和二十八年当時の足柄上郡桜井村が市に合併せられたもので

曾比・東栢山・西栢山の三部落戸数四百数十戸に依って構成せられて居ます。農聖二宮金次郎は此の東栢山で誕生しました。今は立派な尊徳記念館も出来、一昨年生家も近年柳新田から買い戻されまして研究家達の愛好の資料になっております。

本日は其の小部落西栢山（戸数五十戸）に在る薬師堂の由来に就いて書きましょ

に見る目もそむける程に感じたと如何にも気の毒そうな態度で話された時の私の気持は、榮枯盛衰を偲び現実に悲哀を感じる思いがして、何んとも言い難い態度に打たれた。これというのも幕末時代の名主、組頭等、町役人尊重の遺風が尾を引いている頃の思想の現れの一つであると思う。

た医王山正見寺（薬師堂）の縁記である事が判明しました。次の通りです。

縁記

相模国足柄上郡西栢山村医王山正見寺本尊石仏薬師如来者豊驗新而尋常志かるに此像之根元をたずね奉るにむかし人皇五十二代嵯峨天皇弘仁年中高野山空海大僧都諸国諸国行脚の刻閑東伊豆国かこかこ修禪寺並走湯權現箱根足柄湯本板橋巡歴此村中徘徊なされ或は病人を加持して平癒を得せしめまた仏像堂宇を建立し給う時に当村貧窮の病人を憐み拾い石仏薬師の尊像を彫刻

延享二乙丑年霜月吉日

嵯峨天皇（弘仁年）千五百五十四年前
延享二乙丑年 二百二十年前

この巻物の筆者は誰やら詳ならず
総記の中の礼誦（念仏）とは

がしゃくしよせうしよ、ごう、かいひむしよんじん、
我昔所造諸悪業、皆由無始貪瞋癡
従身口意之所生、一切我今皆懺悔

以上三回唱へ

光 明 遍 照 十 方 世 界
念 仏 象 生 撮 取 捨

以上一回唱へ

正見寺西東北も南も押し並べて
楽土栢山に無病折らん
おんころころ せんだい まとうに
そわか
南無阿弥佉仏
と云う事になりました。

そこで昭和三十三年八月九日小田原市郷土文化館並に
書館より係の方出張して頂き、小生宅に於て礼誦(念仏
)をテープフコーダー及び八ミリ映画に納めたのであり
ます。

御協力して頂いた方々は(当時)
井上 ヒロ 八十五才(井上英一母)
米山 キヌ 八十四才(米山直吉母)
米山 フサ 八十二才(米山元治母)
野口 ヨシ 八十才(野口利雄母)
奥津 トミ 七十七才(奥津実母)
奥津 スミ 七十四才(奥津喜久平母)
奥津 リン 七十一才(奥津捨母)
吉崎 ミツ 六十九才(吉崎徳蔵母)
奥津 チヨ 六十六才(奥津閑蔵妻)
高橋 イノ 六十三才(高橋賢一母)
吉崎 リツ 六十才(吉崎年一母)
田代 ハル 五十七才(田代徳太郎妻)
野口 マツ 五十七才(野口徳造妻)
吉崎 マツ 五十六才(吉崎昭一母)
以上十四名であります。

人間を魅した 私の伯父さん

内川 武雄

私の伯父さんは、金田村金に養子に來たのだが、今生
子字上河原の生れ、私の家 きていと、百二才で元治

元年の生れである。よく自
分の若い頃の話をしてくれ
たが、その中の一つをここ
に書いて見ました。伯父さ
んは若い頃にはと話し始め
た話、投網を打つのがとて
も好きだったそう。いつ
も現在の松田の十文字橋附
近で投網を打つと魚がよく
獲れるがそのような時にか
ぎって必ず狐に魅れて空
らびくで帰る時が多かった
そうだ。或る時、その日に
かぎって何んにも獲物がな
いのでふとした出来心から
今日はまだお日様も高いし
一つ人間を魅してやろうと
思って、花さかりのおそば
畑にとびこみ人の見ている
のもかまわず「おおふかい
おおふかい」と言いながら
一面に投網を引きすったの
でおそば畑はめっちゃめっちゃ
になっちゃった。見てい
た人達は「仲次郎さんは狐
に魅されているのだからだ
れかおしえてやれ」と叫べ
んだ。これを聞いた仲次郎
さんすました顔で本日はこ
れでおしまい、と投網をか
ぎいでさっさと家に帰った
そうだ。あとで「仲さんが
狐に魅されたので、おらが
そば畑はだいなしだ」と愚
知をこぼすやら大騒ぎ、仲
さんはすましたもので、い
つも狐にばかりばかされた
が、今日は人間をばかした
のだと大笑い、昔の人はこ
んなばかげたいたすらし
たそうです。

日向屋敷

小田原音波
奈しによる
事務局

慶長十九年、忠隣公は家
康の攻略の犠牲となって、
改易配流処分を受けた。
小田原に残された夫人は城
を退去して、谷津に屏居し
た。時の人はその邸を「日
向屋敷、日向御前、お谷津
様」と称した。日向屋敷と
いうのは、夫人が遠州掛川

願いを箱にこめて

郷土文化館内 M

使うる者も少なく、昨日に
変わる身の上である。
離合集散つねなき戦国の世
とはいえ、夫人の受難は大
きかった。こうして春風秋
雨、十一年の永い間苦勞さ
れながら、遂に憂鬱華の花
は咲かず、寛永元年九月廿
八日向屋敷で果報少くな
き生涯を終へたのである。
忠隣公に先立つこと四年で
あった。屋敷跡は、瀬戸秀
兄先生の調査によれば、
田原停車場南西方富士屋自
動車待合所を右に、あさひ
漬物店を左に行き当り、右
へ入る小路、此辺一面が即
ち日向屋敷の跡である。と
又、夫人の墓は十字町正恩
寺にある。お谷津様の愛称
にはかなく死んだ貞節、妙
賢院円空権尼の墓場の土よ
軽かれと祈ろう。

先日某氏より郷土文化館
へ展示物の提供があったが
その展示物を運搬するため
に使用した箱はたんなる古
めかしい普通の箱のように
見受けたがよく見るとふた
の中央部に縦十二・五セン
チメートル横四センチメー
トルの長方形の穴がみられ
て、現在の選挙の投票箱と
ほぼ同じ形をしている。ち
なみに形状を寸法で示して
みると箱の大きさは縦六十三
センチ、横四十二センチ、
高さ四十二センチ。角と上
部の穴のまわりは鉄製の金
具で縁取りし、前部には同
じく鉄製の鍵がついている
制度としては目安箱を毎月

二日、十一日、二十一日の三日評定所の前に出して置き、庶民に限り(1)政治に関する意見(2)官吏の私曲(3)訴訟の滞留などに就き訴えようとするものがあれば、訴状を書くことを認められ、姓名住所を明記して箱中に投じる。但し匿名にして投じたり、又は人を陥れんが為めの造言は嚴禁してありこれを犯した者には罰が与えられた。そしてもし箱中に訴状があると認められた場合は徒目付がこれを受取って目付に出し、目付はこれを側衆に出し、側衆より將軍に呈す。この箱の錠は將軍自ら開いて状を檢し、又は側衆に読ましてこれを取捨てるのが例であった。こ

天地春光に満ちて桃桜妍を競うの候、漸く誌上も調って前途に曙光を見るようになったことは、誠に喜びに堪えないと共に、編集担当者への労苦に感謝を惜しみません。特に原稿蒐集に就いては、毎例会の都度これが話題の中心となるのも寄

一つの提案

浅見 靈風

稿者が少ないからと思われ
ます。
この集稿策及び内容充実
を目的として、一つの提案
をしたいと思ひます。それ
は書いたから読むの一方
知りたい事を書いてもらう
一即ち「質問欄」を新設し
たら如何でしょうか。会員

から市域内の歴史に限り寄
せられた質問を、その道の
専門家に答えて置く方法を
執つたなら、あらゆる面に
於て内容充実の効果が擧が
ると考えられます。
執筆者に於かれても、そ
の質問に就いては幾日に於
て関連記事が必要としない
様、その内容に依つては続
きものとして連載して頂い
たら、編集部の手も半減
し得ると思ひます。

馬車

横浜では外国人が早くから
乗り廻していた。二頭だて
で黒ん坊のぎよ者が多かっ
た。小田原まで遠乗りと酒
落るのは外人か、日本人で
は華族様ぐら이었다。料
金が小田原まで二十五円も
したので、華族だつて
そう簡単には乗れたもので
はない。小田原へ馬車で来
た最初の人は有馬という華
族の御隠居であつたらしい
然らば、小田原で最初に馬
車を買つて乗り廻したのは
誰かといへば、松岡山二で
あろう。よしんばそれが横
浜あたりから中古品を仕入
れて来たとはいへ、春は馬

尚、「文芸欄」において
短歌・俳句・新詩等を随時
掲載するのも一方法と考
えます。
要は原稿の量の問題であ
ります。これが取捨は編集
者の良識に俟てばよいでし
ょう。どうか会員諸氏に於
かれても、右提案に協力せ
られ競つて知りたいたいこ
と、聞きたいことを出題され
様希望します。

車に乗つて、松岡氏の得意
思ふべしである。明治十五
六年頃か、然し馬車も次第
に墜落し、其の後神奈川と
小田原の間にガタ馬車の乗
り合いが開けて住復した。
料金は七十銭か八十銭程だ
つた。小田原の仕立場所は
幸町であつて成駒屋と云つ
た。「馬車の別当さんは小
弁慶の着物、それで女衆を
まよわせ
る」



人力車

明治四年頃である。板橋村
あたりの者で、なんの糸吉
とかいう男があつた。他人
から、お前は朱房の十手を
持つとばかに似合うといわ
れたら、その風俗をやりた
くてたまらず、岡っ引にな
つたという位の男である。
この糸吉が江戸から人力車
を四台ばかり買つて来た。
椅子へ柄を取り付けた様な
ものであつた。その次に出
来たのが、非鯉や武者絵な
どを描いた時絵の美麗なも
のだった。これらを人足に
貸して曳かせた。車宿は高
梨町の高橋久五郎の所であ
つたらうか。
板橋のさる寺の坊主がこの
人力車に乗つたところが、
車曳が棍棒を手放したので
いきなりひっくり返つた。
車夫は申訳がないと、ひら
あやまりにあやまつたが、
坊主は「いや、かまうまい
この人力車はひっくり返へ
る様に出来ている」
編集部 小田原昔話より

紫陽花の春情の果て月を
得て
夏草やはのかに匂ひ影を
敷く
七夕を知りそむ古歌に吾
子育つ
海光の丘にあまねしびわ
熟るる
天心の日もたまゆらの夜
薄暮
吾も妻もすでに老いけり
トマト愛す
松葉牡丹の盛り積乱雲ゆ
らく、
立あふひ一葉こぼれて花
降りす
不機嫌に裸となりし二階
かな
夏蝶のよなよな舞ひぬ昨
日今日

第十号

昭和三十七年五月十五日発行
(毎月一回発行)
会費 一ヶ月三百六十円
発行人 小田原史談会
編集人 機関紙発行委員会
発行所 小田原市幸一丁目
郷土文化館内
小田原史談会